



しま  
地域だより  
8月号  
サザンクリーンセンター推進協議会  
島原歴史散歩  
—グスクと宿道—

# 棚原の石畳道と 棚原グスク



歴史の息吹を今に伝える棚原グスク跡

棚原は、西原町の北部台地の裾野に広がる古い集落で、その名の由来は、段々畑が棚状に広がっていたため言われている。棚原グスク跡は、西原町字棚原の北西に位置する標高およそ150メートルの森の中にひっそりと残されており、城郭や外郭も判然としない。およそ14世紀から15世紀にかけて築造されたグスクで、琉球国由来記に記載されている「棚原之殿」と思われる。近年の発掘調査で、グスク系の土器、輸入陶磁器などの遺物が出土しておりわずかに往時の生活を忍ばせてくれる。今では訪れる人も少なく、歴史の彼方に埋もれた城跡といえる。

近隣には、棚原ノ口殿内、石畳道、宮里家のウワール（豚小屋）など昔を偲ばせる遺跡が散在し、歴史に関心を持つ人々にとって絶好の散歩道といえる。

現在、棚原ノ口殿内は鮮やかな朱色の拝殿が設けられ、ミルク神が祀られている。伝承によるとそこに祀られているのは、ユヌ神（世の神）で、旅立ちに際しては安全を祈願したと伝えられている。

また、古色蒼然として往時の面影を今に伝える棚原の石畳道は、棚原公民館のすぐ脇に道幅1.8メートル、長さ22メートルの道であり、竹や木々に守られて良好な状態を保っている。

第一部会

ごみ処理施設を視察研修 (下)

サザンクリーンセンター推進協議会施設建設選定部会(第一部会・部会長 照屋義美)は、去る5月25日(月)にうるま市の美島環境クリーンセンターをはじめ県内4箇所のごみ処理施設を視察した。視察には、照屋部会長をはじめ15人の委員が参加、施設の稼働状況、地域との係わり、課題等についてつぶさに視察した。部会では、今回の視察内容を参考にして南部地域におけるごみ処理一元化施設建設の早期実現を図ることとしている。視察研修内容を、前号に引き続きレポートする。

浦添市クリーンセンター

浦添市クリーンセンターは、浦添市伊奈武瀬の海岸沿いの埋立地に昭和57年に建設、平成14年に排ガス高度処理改造、灰溶融施設を新たに設置して稼働している。同センターは、環境対策及び廃棄物の再資源化を基本姿勢としてごみ処理を推進している。ごみを焼却した後の焼却灰は溶融してスラグ化し、土木資材として再利用している。



浦添市クリーンセンター内のリサイクルプラザ

イクル施設である。市民の自立的な参加によるリサイクル情報や環境学習の拠点として親しまれており、衣類・本・台所用品、おもちゃなど市民からの不用品を受け入れて展示及び提供を行なうユニークな施設である。

那覇市・南風原町環境施設組合管理施設

那覇市・南風原町環境施設組合は、那覇・南風原クリーンセンター、環境の杜ふれあい、那覇エコアイランドの3施設を管理運営している。

①那覇・南風原クリーンセンター

南風原町字新川の高台に立地する那覇・南風原クリーンセンターは、那覇市及び南風原町から搬入されるごみを処理している。「環境に優しい資源・エネルギー還元施設」として平成18年に竣工し、①環境を考える学習の場、②万全の環境対策、③資源の再利用、④最終処分量の削減、⑤県内最大の廃棄物発電施設を基本方向に地域住民の快適な生活のため日々努力している。電気は全て自家発電でまかない、余った電気は年間およそ1億円で沖縄電力に売っている。



クリーンセンターの余熱を利用した還元施設「環境の杜ふれあい」

②環境の杜ふれあい

環境の杜ふれあいは、那覇・南風原クリーンセンター設置に伴う地域への還元施設として建設され、地域住民をはじめ近隣の人々がスポーツ、レクリエーション活動を楽しんでいる。那覇・南風原クリーンセンターの余熱を利用して、



那覇・南風原クリーンセンターを視察する第一部会委員

③那覇エコアイランド

那覇エコアイランドは、那覇市港町の海岸沿いに設置され、県内初の海水を利用した一般廃棄物海面最終処分場である。焼却などの中間処理を経て残った一般廃棄物の残渣を海面最終処分場に埋め立て、海水は余水処理施設で浄化され国の基準値を大幅に下回るクリーンな海水を放流する。最先端技術を駆使した処理場である。

岩盤浴、温浴室、サウナを設置している。また、体育館、トレーニングルーム、研修室などのほかグラウンドゴルフを楽しむこともでき、地域に親しまれ多くの利用者で賑わっている。



海水を利用した最終処分場「那覇エコアイランド」



糸豊環境美化センター

糸満市・豊見城市清掃施設組合のごみ処理工場「糸豊環

### 進むごみ減量化

適正なごみ処理は、健康で快適な生活を送り、地域の生活環境や文化はもとより地球環境を守る上からも緊急かつ重大な課題となっている。糸満市、豊見城市、南城市、八重瀬町、与那原町及び西原町で構成する、サザンクリーンセンター推進協議会では、適正なごみ処理一元化施設の建設を目指して各種の取り組みを行っているところである。南部地域における「私たちのごみは今」。第3回は、糸満市・豊見城市清掃施設組合の管理する「糸豊環境美化センター」を紹介する。

# 私たちのごみは今!

## 【第三回】糸満市・豊見城市清掃施設組合

境美化センター」は、糸満市東里の「平和創造の森公園」の西方にあり、糸満市・豊見城市の一般廃棄物中間処理を行っている。

この地区の家庭系ごみは、おおむね「可燃ごみ」「不燃ごみ」「粗大ごみ」「危険ごみ」「資源ごみ」の5種分別である。また、事業系は、「可燃ごみ」「不燃ごみ」「危険ごみ」の3種である。

当センターは、可燃ごみの焼却処理施設と不燃及び粗大ごみの破碎・圧縮処理を行なう粗大ごみ処理施設を備えている。平成10年の稼動以来11

年目を迎えており、稼動時から平成14年まではごみ量が増え続けていたが、糸満市、豊見城市のごみ減量化に対する熱心な取り組みによって平成15年以降は減り続けている。焼却残渣については、平成19年度から22年度までの4年間の期間限定で、倉浜衛生施設組合に一時預かりしてもらっている。ただし、23年度以降は預けた残渣を引き取らなければならぬ状況にある。

収集対象人口は、約113,700人、平成20年度のごみ総搬入量は約30,000トン、1日当たりおよそ83トンである。地域の人口は増加しているが、逆にごみ搬入量はここ数年減少化傾向にある。

### 灰溶融処理方式を決定

当センターでは、焼却灰のリサイクルを目指した灰溶融炉の整備事業を進めており、このほど、処理方式を「焼却炉直結型」(処理能力:11t/

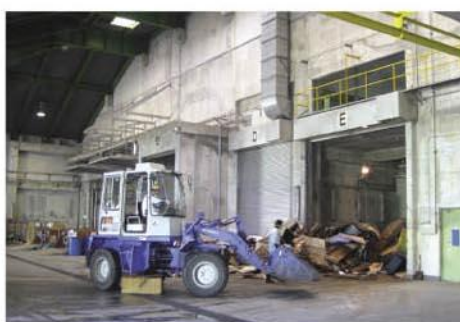
日×2炉 稼働日数332日)にすることを決定した。この方式は、燃費を安く抑えられ、安全性・安定性に優れていること、溶融後の再資源化が可能なこと、操作人員が少ないこと等が利点であり、平成23年4月の本格稼動に向けて、住民負担の少ない安全安心な施設整備に取り組んでいるところである。

### 将来は一元化施設を

糸満市・豊見城市清掃施設組合の上原和事務局長は、「西崎及び豊崎地区の新興工業地帯があるため、昼間人口が多い、という地域特性がある。事業系のごみは増加傾向にあるものの、糸満豊見城市ともごみ減量化取り組みに対する意識が極めて高く、平成14年度のピーク時に比べておよそ16%もごみが減っている。

ところで、南部地域におけるごみ処理一元化施設の建設に向けて、各市町がより一層取り組まなければならぬと思う。現在のままでは莫大な財政負担を強いられる。財政負担軽減の上からも是非一元化施設を建設することが必要

である。地域の皆さんに施設の必要性、内容を理解していただきたい。南部で一つのごみ処理一元化施設を建設することは、行政コストの低減につながることも、地域住民が清潔で快適な生活を送る上でどうしても必要である」と語った。



不燃性の危険ごみを処理



蛍光管の処理状況

四組合正副管理者会議開かれる

し尿及び浄化槽汚泥処理施設の広域化を検討



城間俊安 南風原町長

し尿及び浄化槽汚泥処理施設の広域化について検討するため、島尻消防清掃組合、東部清掃施設組合、糸満市・豊見城市清掃施設組合及び南部広域行政組合四組合の正副管理者会議（座長：南部広域行政組合管理者 城間俊安南風原町長）が去る7月6日（月）14時30分から、



四組合正副管理者会議を開催

自治会館で開催された。

南部地域におけるし尿処理は、東部清掃施設組合の西原処理場、島尻消防清掃組合の清澄苑及び糸満市・豊見城市清掃施設組合の岡波苑で処理しているが、いずれの施設も築20年以上経過している。特に、西原処理場は、築35年が経過して老朽化が著しいため、できるだけ早期に改築する必要がある。

当面は5市町で広域化協議

当日の会議では、いずれの施設も改良時期にさしかかっているため、施設の効率的運用、財政負担軽減の観点から将来一元化に向けて検討することが確認された。また、各施設の耐用年数が違うため岡波苑は当面存続させ、南城市、八重瀬町、与那原町、西原町及び南風原町の5市町で広域化に向けて協議していくことも確認した。

地域の偉人 5回シリーズ

政治家 湧上聾人(続⑤)



師・中野正剛 (昭和17年)

師・中野正剛

筆者、聾人の師・中野正剛の詳細は紙幅の都合で省略。それ故、読者には、師の四男・中野泰雄著「政治家／中野正剛（上・下）」（一九七二年発行）をお読み頂き、同時に一九八四年七月五日、NHK放映の「東条を倒せー中野正剛と東方会ー」をご覧ください（筆者も協力聾人のことも挿入。それでは、師・中野正剛（以後「師」と表記）と聾人の間を去来する奇妙な偶然と縁を追う。

明治十九年（一八八六）二月二日、福岡市西湊町に生れ、中野甚太郎と命名（明治二年生一湧上平二と命名）。三歳、修猷館中学入学、柔道練習中「左脚負傷」（聾人遊泳中に耳を負傷）。一七歳、自ら正剛と改名（三五歳聾人と改名）、青年修養道場「振武館」建設、青年修養団体「玄南会」組織（聾人「半学半農」の夢、教師を目指す

すも聾の発覚で沖繩県師範学校退学）。一九歳、早稲田大学予科へ入学（聾人早稲田高等師範部へ二二歳入学）。二〇歳、早稲田大学政治専攻科へ進学。三四歳、衆議院議員へ当選（聾人三七歳沖繩県会議員へ当選）。四一歳、「左足切断」（聾人「聾者」）。

だが、大政翼賛会の弾圧により（沖繩同仁病院看護婦・久保田ハル談）一特高が病院のあらゆる場所と下駄箱や便所まで調べた、五月七日一聾人、同志・島袋静江と沖繩同仁病院会計（男性）三人は選挙違反で拘留された（久保田ハル談一聾人の弁当を持って五日間那覇警察署に通った）。

「政治家／中野正剛（上）」四六六頁を繰ると「第二回普通選挙一昭和三年二月二〇日。演説会一二月八日午後六時、福岡市九州劇場一沖繩県出身の湧上聾人が弁士に立った。正剛はそして聴衆によびかけた。」この記述は、応援に駆けつけた聾人の「師」に対する畏敬を感じる。

昭和十八年（一九四三）六月二七日、「師」は、大政翼賛代議士会で幹部を弾劾。東条軍事情権への反対活動を鳩山一郎・三木武吉の三者連合で行うも東条退陣工作失敗。一〇月二日、警視庁留置場に拘束一東方会斉検挙される。二五日、東京憲兵隊にて反軍罪取調。二六日、午後三時一憲兵隊監視のもと帰宅。二七日、午前零時一憲兵隊二人の不法監禁のもと「師」は自宅で「断」（自刃）一遺書の一片「戦争ト人生トヲ戦イ抜ケ」があった。

昭和十六年（一九四一）三月八日「太平洋戦争」勃発一時代は東条英機（十月二八日東条内閣成立）の大政翼賛会（第二次大戦中の国民統制組織）の風が吹き荒れていた。

昭和十九年（一九四四）四月、大政翼賛会により聾人は衆議院議員失格となった。

昭和十七年（一九四二）三月二四日、「師」の東方会は「大政翼賛会推薦拒否」を声明。四月三〇日、総選挙一非推薦で「師」最高点当選。しかし、東方会四六名の公認候補を立てたが七名の当選であった。聾人も非推薦で衆議院議員に当選し

人、首里城下の世持（「オモロ語」で世直しの意）橋に立ち、魚池（竜潭の池）を凝視。やがて、水面の風音に「天下一人を以て興る」と「師」の声が「幻聴か」。その向こうには、かつて「半学半農」の教師を目指すも退学になった沖繩県師範学校が「陽炎か」。（終）